

第2版 はじめに

何となくミステリアスな精神医学、その精神医学ワールドを精神科医の「ドクター ナビ」と人工頭脳の「脳太郎」のコンビが案内します。

こころの病気の主座はハート（心臓）ではなくて、脳にあります。しかし、脳がどのようにしてこころや精神に働きかけているかは大きな謎でした。近年、脳科学の分野での研究は著しく発展し、脳とこころの関係が少しずつ明らかになり始めました。特に脳画像、遺伝子、神経化学、あるいは認知機能を取り扱う神経科学などの研究に支えられ、こころの病気のもとには、脳の働きのなんらかの乱れがあることが見出されるようになりました。このように、こころの病気の診断そして治療は進歩を続けています。

新しいこころの病気にも関心が高まってきました。たとえば、新型うつ病がマスメディアを賑わしていますし、これまで見過ごされてきた双極性障害が患者さんや家族の方々に多くの困難をもたらしていることが気づかれるようになりました。また、子どもの病気だと思われていたアスペルガー障害や注意欠陥／多動性障害（AD/HD）は、大人になっても症状が残り、毎日の生活を妨害していることも明らかになりました。治療の面では、統合失調症、うつ病、双極性障害、そして認知症などの新しい治療薬が開発されました。認知行動療法や対人関係療法などの心理療法の有効性も科学的な手段で確認されました。本書もこれらの進歩を取り入れ、改訂しました。

現在、精神医学の領域で世界的に広く用いられているこころの病気を診断したり、分類するための基準が2つあります。その1つはアメリカ精神医学会の『精神障害の診断と統計のマニュアル（DSM）』で、他の1つは世界保健機構（WHO）の『ICD-10 精神および行動の障害』です。両方とも数年ごとに改訂が繰り返されています。『精神障害の診断と統計のマニュアル』は1994年に第4版（DSM-IV）が、そのテキスト改訂版（DSM

-IV-TR)が2000年に発表されましたが、その後の改訂が遅れていました。そして第4版の発表から19年後の2013年5月に、待ちにまった第5版(DSM-5)が発表されました。精神障害の分類や診断基準にいくつかの変更が加えられています。そこで本書も改訂にあたり、DSM-5に沿って説明します。しかし、DSM-5は発表後まだ日も浅いことから、前版のDSM-IV-TRも併用していきます。

ドクター ナビと「脳太郎」が精神医学の基本と、これら旬のトピックを案内します。精神科は、なんだか訳がわからないものだと思っている人、怖いからと敬遠している人、食わず嫌いの人、関係ないと思っている人に、精神医学を「好き」になってもらえればうれしいです。

2014年1月

越野好文
志野靖史